

# 大学生はポルトガル語学習をどう捉えているか —「ポルトガル語 I<sup>1</sup>」の履修者を事例に—

国際関係学科 高阪 香津美

## 1. はじめに

文部科学省は「大学における教育内容等の改革状況について(2009)<sup>2</sup>」の中で、国際化を目指した大学の取り組み状況を把握するにあたり、外国語教育の実施に関する調査を行っている。それによると、調査協力校 742 校のうち、「英語」を開設している大学は 719 校存在し、その割合は最も高い。第2位には 607 校の「中国語」が、第3位には 543 校の「ドイツ語」が続く。一方、「ポルトガル語」は、開設している大学が少ないため上位10 言語の中には入っておらず、「ポルトガル語」を開設している大学がいったい何校あるのかここからは判明しない。また、カルチャーセンターや街の語学学校に目を移しても、ポルトガル語が学習できる場所を探すのは至難の業であろう。

リーマンショック以後、日本で暮らすブラジル出身者の数は確かに減少してはいる。しかしながら、依然、ブラジル人が外国人登録者数の第3位を占めている<sup>3</sup>ことを鑑みると、ともに生きる身近な外国人ともいえるブラジル人の母語であるポルトガル語やブラジル文化を学び、理解する機会が日本社会において非常に限られているといえる。

こうした状況下、本研究ではポルトガル語教育を実施している数少ない大学の一つである愛知県立大学を対象とし、ポルトガル語を実際に履修している学生に対して行った調査結果

---

<sup>1</sup> 「ポルトガル語 I」は、筆者が所属する愛知県立大学において、主に、1年次の学生が履修する「全学共通科目」の「外国語科目」である。週に二度開講されており、原則、学生は両方の曜日の授業をあわせて履修することになっている。いずれの「ポルトガル語 I」も2クラス編成であり、看護学部生用のクラスと看護学部以外の学生用のクラスに分かれている。2009 年度後期に筆者が担当したクラスは、両方の曜日ともに看護学部以外の学生用の「ポルトガル語 I」であり、アンケート調査は再履修等、一方のクラスのみ履修者も含み、筆者の授業を履修した学生全員を対象に行った。

<sup>2</sup> 文部科学省は各大学が教育内容等の改善への取り組みを促進させることを目的とし、定期的なすべての国公立大学を対象に「大学における教育内容等の改革状況について(2009)」を実施している。その中の一つに学部における外国語教育の実施状況を表す「外国語教育の実施状況」という項目があり、開設大学数が多い上位 10 言語が示されている。それによると、調査協力校 742 校のうち、英語(719 校)、中国語(607 校)、ドイツ語(543 校)、フランス語(541 校)、韓国・朝鮮語(430 校)、スペイン語(236 校)、ロシア語(173 校)、イタリア語(124 校)、ラテン語(93 校)、アラビア語(47 校)であった。

<sup>3</sup> 法務省入国管理局統計によると、国籍別にみる外国人登録者数において、ブラジル籍は第3番目に位置付けられてきた。しかしながら、依然、順位には変動がないものの、1986 年末現在統計を除き、毎年、増加し続けていたブラジル籍の外国人登録者数は、2008 年末現在統計以降、減少傾向に転じている。

を分析することで、一般的にマイナー言語とみられがちなポルトガル語を履修する学生がポルトガル語学習をどのように捉えているかを明らかにし、大学のポルトガル語教育に何が求められているかを探してみたい。

## 2. 調査概要

愛知県立大学では、愛知県がブラジル人の集住地域<sup>4</sup>であることにともない、2008年度より「一般教育科目(2009年度以降『全学共通科目』)」の「外国語科目」の選択肢の一つとして「ポルトガル語」を開設している。こうした中、筆者はポルトガル語が設置されている数少ない大学の一つである愛知県立大学において、大学におけるポルトガル語教育が日本の多文化共生社会を構築する上で果たす役割について探るため、2009年度後期に筆者が担当した月曜日1限と木曜日2限の「ポルトガル語Ⅰ」を履修する28名の学生に対しアンケート調査を実施した<sup>5</sup>。このアンケート調査の質問項目は次のように大別できる。(1)ポルトガル語学習への姿勢に関わる項目、(2)ブラジル人やブラジルの言語文化との接触に関わる項目、(3)ブラジル人やブラジルの言語文化に対する位置づけや関心度に関わる項目、(4)ポルトガル語の授業や学習そのものに関わる項目の4つであり、計20項目からなる。なお、上記のアンケート項目は、中等教育課程におけるロシア語教育の実施状況に関する調査を行った白山(2003)で用いられたものに、多文化共生と通時的な視点を盛り込み、修正を加えたものである<sup>6</sup>。このたびの研究では、上記の質問項目のうち(1)を分析することにより、ポルトガル語を履修する大学生がポルトガル語学習をどのように捉えているかを明らかにする。

アンケート調査の結果と考察に移る前に、筆者が担当した「ポルトガル語Ⅰ」の授業内容がいかなるものであったか、簡単に触れておくことにしたい。先にも述べたとおり、2009年度後期、筆者は月曜日1限と木曜日2限に看護学部以外の学生向けに開講される「ポルトガル語Ⅰ」を担当した。月曜日はシラバスにも「ポルトガル語の基本的な文法項目と日常生活で必要とされる語彙を学習」とあるように、基本的な文法知識の習得を中心に据えている。そのため、練習問題が豊富なテキストを選び、文法項目の説明と学生の理解を確認するための問題演習を繰り返し行った。また、履修者が授業以外の場でもポルトガル語の学習機会を持つきっかけを与えることや履修者が自身の文法定着度のバロメーターとすることを目的に、定期試験とは別に小テストを複数回実施した。しかしながら、その一方で、ポルトガル語の文法知識を身につけるだけでなく、「日本の社会の多言語・多文化化を見据え、在日ブラジル人をとりまく現状を理解する」とシラバスに掲げたように、ブラジル文化や日本に暮らすブラジル人の現状と課

<sup>4</sup> 愛知県多文化共生推進室統計によれば、例年、愛知県内の外国人登録者数の中で最も高い割合を占めているのがブラジル人である。

<sup>5</sup> 本稿は、2009年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究スタートアップ)交付により実施したアンケート調査データを用い、分析を試みたものである。

<sup>6</sup> 筆者はこのたびの調査に先立ち、高等学校におけるポルトガル語教育の現状と課題に関する調査を実施している。その際、ポルトガル語教育と高等学校における英語以外の外国語教育という点で共通しており異言語間の調査結果が比較可能なことから、高等学校のロシア語教育の実施状況に関する調査を行った白山(2003)の枠組みを援用した。この枠組みは高等学校を対象に実施された調査に用いられたものではあるものの、これを用いることで高大間の調査結果も比較可能であることから、このたびの調査にも同枠組みを使用することとした。

題について、折に触れ紹介することにより、ポルトガル語学習の意義を確認し、モチベーションを高めることにも努めた。

次に、木曜日2限の「ポルトガル語 I」であるが、シラバスにも「ブラジル出身の人々との会話に必要な重要構文を提示するとともに、その構文の定着をはかるため、実際に用いられる状況の中で会話力を身につけることを試み」とあるように、月曜日で学習した文法知識を基礎とし、運用能力を養うことを学習の中心に据えている。具体的には、「必要・義務の表現」、「希望・欲求の表現」、「依頼の表現」などであり、毎週、そうした表現内容に必要とされる動詞とその動詞を含む重要構文を短いダイアログの中で学習した。そのダイアログについては、日本で暮らすブラジル人と実際に接触するような場面を想定したものを可能なかぎり選択し、ペアワークを行うことにより口から自然に出てくるようになるまで繰り返し練習した。また、月曜日と同様、小テストも複数回実施し、理解の定着をはかるとともに、ブラジル文化や日本で暮らすブラジル人の現状についてもダイアログのテーマにあわせて随時紹介し、ブラジルという国やブラジル人に対する理解の助けとした。

### 3. アンケート調査の結果と考察

本章では、筆者が担当したいずれか一方の、あるいは、両方の曜日の「ポルトガル語 I」を履修する学生 28 名に対して実施したアンケート調査の結果と考察を示す。以下では、ポルトガル語学習に対する履修者の位置づけを把握するために尋ねた7つの質問項目について述べる。

#### 【ポルトガル語学習に対する履修者の位置づけ】

##### (1) ポルトガル語の学習動機について

「ポルトガル語の学習動機」については、「愛知県にはブラジル人が多いから」など、ブラジル人やポルトガル語が自分にとって身近な存在であることを理由に選択した者が 10 名と最も多かった。「ブラジルに興味があったから」など、ブラジルやポルトガル語そのものへの興味・関心を理由に挙げる者が次に多く、6名が回答した。それ以外にも、「愛知県には多くのブラジル人がいるため、ポルトガル語を知っていると役立つと思うため」など、将来、地域の外国籍住民とのコミュニケーションに役立つことを理由に選択する者(4名)、「名古屋で就職するなら少しは知っていた方がいいと思ったので」など、就職を見越してポルトガル語を選択する者(3名)や「愛知県にたくさんいるブラジル人とコミュニケーションがとりたかったから」など、地域の外国籍住民との交流を目的に選択する者(2名)、「海外に住んでいる時、ブラジル人と仲良くなり、ポルトガル語を覚えてもらっていたから」という個人的な事情を挙げる者(1名)がみられた。「なんとなく(1名)」や「他の言語に比べて読みやすそうだったから(1名)」といった漠然とした理由からポルトガル語の履修を決めた学生もわずかながら存在したが、地域に暮らすブラジル人住民の存在を意識した上で、彼(女)らとのコミュニケーションを視野に入れた学習動機が目立った。

##### (2) 身につけたいポルトガル語能力について(複数回答)

「身につけたいポルトガル語能力」に関する問いには、「ちょっとでも会話をして、仲良くなれ

るようなコミュニケーション力」など、会話力と回答する者が 19 名と最も多かった。「総合的な力」など、漠然とした能力を挙げる者が3名、「文法」と回答する者が3名のほか、「語彙力(2名)」、「聴解力(1名)」、「読解力(1名)」、「英語とポルトガル語の差異(1名)」、「無回答(3名)」という結果であった。ここから、履修者は地域に暮らすブラジル人住民と意思疎通をはかるために必要な会話力を身につけることを目的にポルトガル語学習をしている傾向があることがわかった。

### (3) ポルトガル語を学んで良かった点について(複数回答)

「ポルトガル語を学んで良かった点」を尋ねたところ、「アルバイト先にブラジルの方が来て、ポルトガル語での会話を楽しめた」、「愛知県はブラジル人が多いから、将来役に立ちそう」など、教室で学習したポルトガル語が実生活で役立った喜び、あるいは、今後、役立つことへの期待感を挙げる者が 10 名、「英語との違いを比較できおもしろかった」、「現在の日本の国際化に伴う様々な問題について考えるきっかけになったし、学ぶことができたと思う」など、ブラジルの言語文化に対する知的満足感を挙げる者が9名、「ポルトガル語は覚えることも多いけど、日本語とはまったく違う言語なので、新鮮で楽しいと感じられたこと」、「新しい言語を学ぶのは楽しかった」など、学習自体の楽しさを挙げる者が5名、「英語以外の国に興味を持てたこと」など、英語圏以外の国の言語文化に対する興味・関心を持つきっかけを挙げる者が2名、「無回答」が5名であった。教室で学習した内容が実生活の場で発揮できた喜びを挙げる者とポルトガル語学習により身についた知識や教養を挙げる者がほぼ同数であった。

### (4) 履修期間終了後のポルトガル語学習の継続について

「履修期間終了後のポルトガル語学習の継続」に関する問いには、ポルトガル語学習の継続を「希望する者」が 21 名、「希望しない者」が4名、「無回答」が1名、「わからない/迷っている」が2名という結果であり、履修期間終了後もポルトガル語の学習を続けたいという者が圧倒的多数を占め、履修者のポルトガル語学習に対する意欲が感じられるとともに、履修者には授業を離れた後も長期的にポルトガル語学習に臨む考えがあることもあわせて読み取ることができるであろう。また、ポルトガル語の学習継続を「希望しない」と答えた4名の理由については、「こういう機会がないとなかなかできない」、「自分から学ぼうとする余裕がなさそう」、「身につけても使う場がない」、「英語の中免をとりたいたいから」であった。

### (5) ポルトガル語学習と就職の関連について

「ポルトガル語学習を就職と結びつけて考えているかどうか」という問いに、「結びつけて考えている(15名)」、「結びつけて考えていない(13名)」であった。「結びつけて考えている」と答えた 15 名の回答の一部を記すと、「日本語教員になるのにある程度の知識がいるので」、「教員になれば、ブラジルの子と会話が少しならできるかも」などがみられ、将来、希望する職業とポルトガル語学習が直結した具体的な内容が目立った。「結びつけて考えていない」と回答した 13 名の回答には、「私の就きたい仕事にポルトガル語を使う機会がないと思うから」をはじめ、「就職後、仕事としてポルトガル語を使えるレベルではないだろうから」、「どのような職があるのか、まだよくわからない」、「就職というより、日常で何かみつけないか」などがみられた。現実的に就職とポルトガル語学習を直接結びつけている学生が結びつけていない学生の数

をわずかではあるが上回る結果であった。このことから、履修者のポルトガル語学習が教養のための言語学習にとどまらず、将来まで見据えたものとする履修者の存在を確認することができる。

#### (6) 街で困っているブラジル人をみかけた時の対応について

「今、偶然、ブラジル人らしき人が困っている様子を目撃したとします。どうしますか」という問いに対して、「わかりやすい日本語で話しかけ、伝わらなかつたら英語かポルトガル語で話しかける」、「ポルトガル語で話せなくても、話しかけてみる」、「英語で話しかけてみる。知っているポルトガル語は使ってみる」など、方法は様々ではあるが、「声をかける」と回答する者が16名と最も多かった。また、「声をかけない」と回答する者が4名、「わからない」と回答する者が1名、「無回答」が7名という結果であった。困っているブラジル人住民に対し、履修者の多くは何らかの「声をかける」ことがわかった。このことから、この時点ではポルトガル語を学習し始めてまだ1年であり、ポルトガル語を十分には操ることができないにもかかわらず、履修者はポルトガル語の能力の有無によらず、英語や簡単な日本語を駆使するなどにより、同じ地域社会の構成メンバーが抱える困難を共に乗り越えるようとする傾向があることが明らかになった。

#### (7) ブラジル人住民に関する知識について(複数回答)

「ブラジル人に関する知識」について尋ねたところ、「無回答」は3名で、その他の履修者からは1名が複数の回答を寄せるなど多数の記述がみられた。その中でも、「派遣労働者として働く人が多く、厳しい状況の中で生活していること」、「働くためにたくさんのブラジル人が日本に住んでいること。でも、正規雇用でない人も多い」など、就労に関するもの、「ブラジル人の子どもは、二カ国語も小さい頃から学んできているため、両方の日常会話はできるが、高度な思考をするのが難しい」、「日本語の習得ができず、困難な状況を子どもたちが教育現場で負っている」など、日本語に関するもの、そして、「この地域の小学校ではブラジル人の子が多く、授業において問題を抱えている子が多い」、「ブラジルと日本では考え方の違いからか、なぜ勉強するのかわからないことが多く、ブラジル人の子はあまり勉強に熱心になれない傾向がある(みんなではないけど)」など、教育に関するものが数多くみられた。それ以外の記述には、「多くの人が日本での居住を望んでいる」、「国籍によって住める地域が決まってしまう(マンションとか)」、「日本に暮らす外人はブラジル人に限らず冷たい目でみられている。差別がなくなる」などがあつた。いずれの記述からも、履修者が日本に暮らすブラジル人の生活の現状を多面的に捉え、彼(女)らに関する具体的な知識を持ち得ていることが確認された。これは、「ポルトガル語Ⅰ」の学習目的の一つに、在日ブラジル人をとりまく現状の理解を掲げ、学習してきたことによる成果であると考えられるほか、「ポルトガル語Ⅰ」で得た知識とそれに関連する他の科目で得た知識が有機的に結びつき、幅広く具体的な知識として履修者の中に蓄積されたためであるともいえよう。

ここで、以上の調査結果を本調査に先立って実施した高等学校におけるポルトガル語教育の現状と課題を探った先行研究<sup>7</sup>である高阪(2009)と比較し、大学生の履修者がポルトガル

<sup>7</sup> 2008年7月末に、外国語としてのポルトガル語の授業を実施する公立高等学校のうちの5校の

語学習をどのように位置付けているのか、その特徴をみておく。

ポルトガル語学習に対する履修者の捉え方について、高校生と大学生の履修者を対象とした調査結果の間の違いが際立っていたのは、二者間のポルトガル語学習の目標に対する考え方である。高校生の履修者に関しては、高阪(2009:73)が「履修者は実際に現在学習しているポルトガル語を将来、どのように役立てたいのか、明確なビジョンを持たないまま学習を行っていることがわかった」と指摘しているように、彼(女)らはポルトガル語学習が社会の中でどのように役に立つのか、いまだ具体的なアイデアを持っていないことが挙げられる<sup>8</sup>。一方、大学生の履修者の場合、そのおよそ半数が現実的にポルトガル語学習で得た知識や能力を活かして就職したいと考えており、この点、高校生の履修者とは大きく異なる。その理由として、高校生であるがゆえに自らの将来設計が不明確であるという点も関係していることが予想されるが、それに加えて、近隣に暮らすブラジル人住民を「目にみえる存在」、あるいは、「身近な隣人」として位置付けられていないことが関わっているのではないだろうか。高阪(2009)によれば、高校生の履修者のポルトガル語の学習動機で最も高い割合を占めたのは、「ポルトガル語自体への興味・関心」であり、「近隣のブラジル人住民とのコミュニケーションのため」と回答した者はそのおよそ半数であった<sup>9</sup>。また、ブラジル人住民に関して知っていることを尋ねた質問では、「ステレオタイプの回答」や「日本人との表面上の違い」を言及したものが目立ち、日本に暮らすブラジル人の現状にはいまだ目が向けられていないことが推測できる<sup>10</sup>。その一方で、これまでのアンケート調査結果から、大学生の履修者は周囲に生活するブラジル人住民の存在を常に意識し、彼(女)らとのコミュニケーションを視野に入れた上でポルトガル語を履修していることが明らかになった。その上、愛知県立大学ではポルトガル語の授業のほか、その他の科目においても、日本で暮らすブラジル人を含む外国籍住民に関する知識を得る機会が豊富に設けられており、履修者はポルトガル語を学習する社会的意義について十分に認識する環境にある。こうしたことが大学生の履修者がポルトガル語学習を実社会と結びつけることができた要因であると考えられる。

#### 4. おわりに

本研究では、一般的に依然としてマイナー言語という印象が強いポルトガル語の学習を履修者はいったいどのように位置付けているのかを探る目的でアンケート調査を実施した。そし

---

協力を得て、そこに在籍する34名のポルトガル語履修者を対象に、履修動機、ポルトガル語への関心など心理的側面と言語能力など教育的側面を尋ねるアンケート調査を実施した。

<sup>8</sup> 「ポルトガル語を将来、何で貢献させたいか」を尋ねたところ、「漠然と異文化に触れる(9名)」、「具体的な貢献(4名)」、「海外旅行(3名)」、「道案内(2名)」、「なんとなく貢献できる(2名)」、「貢献できない(4名)」という結果であった。

<sup>9</sup> 「ポルトガル語の学習動機」について、「ポルトガル語自体に対する興味・関心」を持つ者は11名、「近隣のブラジル人住民とのコミュニケーションのため」が5名、「外国語学習そのものに関する興味・関心」が4名、「稀少価値」を訴える者が4名という結果であった。

<sup>10</sup> 「日本に暮らすブラジル人に関する知識」について尋ねたところ、34名のうち14名が「無回答」であった。また、残りの20名の回答についてみたところ、「コーヒーが好きで、サッカーをやるのも好き」、「派手な服」など、ステレオタイプの回答を寄せる者、ならびに、「露出」、「肌の色」など、「日本人との表面上の違い」を指摘する回答が多かった。

て、先行研究として実施された高校生を対象とした調査結果と比較しながら分析を加えた結果、大学生の履修者は、地域に暮らすブラジル人住民とコミュニケーションをするための言語学習であることを十分に認識した上でポルトガル語を履修していること、また、中には、教養としてのポルトガル語学習という位置づけの履修者もいるものの、明確な将来の目標を掲げ、ポルトガル語学習を就職と結びつける履修者の割合が高校生よりも高いことが明らかになり、これらは大学におけるポルトガル語履修者にみられる特徴であるといえよう。そして、こうした結果を踏まえ、授業においても履修者の卒業後というものを視野に入れた仕掛けや工夫、連携が今後は必要になってくるだろう。ポルトガル語を操ることができる人材が依然として不足する中、このようにポルトガル語学習を就職に直結させることは人材を育成する上で有効であり、そうした人材が一人でも多く輩出されることが望まれる。

また、その一方で、アンケート調査の結果にも示されているとおり、必ずしも履修者全員がポルトガル語学習を将来の就職に結びつけているわけではなく、また、そうしなければならない必要性もないであろう。ポルトガル語学習を「就職と結びつけない」と回答する意見の中に、これを裏付けるひとつの示唆を見つけることができる。ポルトガル語学習を「就職と結びつけない」と回答する者の理由の多くに、「ポルトガル語と関わりを持たない就職をすること」を挙げる者が多い中、履修者の一人が「就職というより何か日常でみつきたい為」という回答を寄せた。この回答は、ポルトガル語学習を就職に直接的に結びつけない者であっても、ポルトガル語を用いる職業に従事しないからといってポルトガル語との関係を断ち切るのではなく、身の回りのブラジル人住民との日常的なコミュニケーションの中で大学で履修したポルトガル語学習を役立てようとする者もいることを示唆しており、「就職と結びつけない」と回答する者の中にもポルトガル語と長期的につきあう姿勢を持つ者が存在することがわかる。以上より、同じ地域に暮らすブラジル人住民との意思疎通に必要な言語であるからこそ、ポルトガル語学習を就職と結びつける履修者もそうでない履修者も、どういう形であれポルトガル語とのつながりを履修後も継続させることが求められているのではないだろうか。

このたびの調査結果は、愛知県立大学においてポルトガル語を履修するすべての学生の意見でも、ましてや、日本の大学でポルトガル語を履修するすべての学生の声でもなく、2009年度後期に筆者の「ポルトガル語Ⅰ」を履修した学生を対象に実施した一つの調査事例にすぎない。本研究を基礎調査とし、今後は調査協力校を増やすことで大学におけるポルトガル語教育環境の全体像の把握に努めていきたい。

謝辞:本論文を執筆するにあたり、ご協力下さいましたすべての皆様に感謝申し上げます。

#### <参考文献>

- 白山利信(2003)『中等教育における英語以外の外国語教育に関する調査研究ーロシア語教育を中心としてー』筑波大学現代語・現代文化学系
- 高阪香津美(2007)「多文化共生時代の外国語教育(1)ー公立高校におけるポルトガル語教育のいま」『AnaisXXXVII』日本ポルトガル・ブラジル学会 pp.105-117
- 高阪香津美(2009)『多文化化する日本社会におけるポルトガル語教育の位置づけー母語と外国語の両側面からー』2009年3月大阪大学提出博士学位論文

国際文化フォーラム(2005a)『日本の学校における韓国朝鮮語教育－大学等と高等学校の現状と課題－』国際文化フォーラム

後藤雄介・石井登ほか(2010)「高等学校におけるスペイン語教育の現状と展望」教育総合研究所 紀要 『早稲田教育評論』 第24巻第1号 pp.45-61

<参考ホームページ>

愛知県多文化共生推進室 2011年11月20日付

<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tabunka.html>

法務省入国管理局ホームページ 2011年11月20日付

<http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukantourokusyatuoukei110603.html>

文部科学省ホームページ 2011年11月20日付

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1310269.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1310269.htm)

## 資料

### ポルトガル語学習に対するアンケート調査(ポルトガル語・ブラジル学科以外の学生用)

1.なぜ、「ポルトガル語」を選択しましたか？その理由を教えてください。

理由:

2.大学で「ポルトガル語」を学習する前、ポルトガル語圏の国々に行ったことがありましたか？

(ある・ない)

「ある」と答えた方にお尋ねします。それはどこですか？

3.大学で「ポルトガル語」を学習する前、ポルトガル語を母語とする人と実際に話したことはありましたか？

(ある・ない)

4.どのような力を身につけたいと思い、「ポルトガル語」の学習を始めましたか？

具体的に教えてください。

5.これまでの「ポルトガル語」の学習により、各技能においてどんなことができるようになりましたか？

読む:

書く:

話す:

聞く:

6.「ポルトガル語」を学習する前、ポルトガル語やブラジル文化に関心がありましたか？

一つ選んで下さい。

①非常に関心があった、②関心があった、③普通、④あまり関心がなかった、⑤全く関心がなかった

7.「ポルトガル語」を学習した今、ポルトガル語やブラジル文化に関心がありますか？

一つ選んで下さい。

①非常に関心がある、②関心がある、③普通、④あまり関心がない、⑤関心がない、⑥その他

8.「ポルトガル語」を学んでよかったと思う点を具体的に書いてください。

9.「ポルトガル語」を学習して不満を感じた点はどこですか、具体的に書いてください。

10.「ポルトガル語」を学習していて、難しいと思う点はどんなところですか？自由に書いてください。

11.「ポルトガル語」の授業を履修して、ブラジル人やブラジル文化に対する見方において自分自身の中でどこか変わった点がありますか？

(はい・いいえ)

「はい」と答えた方にお聞きます。以前はどうだったのが、今はどのように変化しましたか？

以前:

現在:

「いいえ」と答えた方にお聞きます。ブラジル人やブラジル文化をどのように捉えていますか？

12.履修期間が終わっても、「ポルトガル語」の学習を続けたいと思いますか？ (はい・いいえ)  
「いいえ」と答えた人にお聞きします。それはなぜですか？

13.現在学習中のポルトガル語を就職と結びつけて考えていますか？ (はい・いいえ)  
「はい」と答えた人にお聞きします。どのような分野でポルトガル語を生かそうと考えていますか？  
「いいえ」と答えた人にお聞きします。それはなぜですか。

14.大学で英語以外の外国語を学ぶ意義はあると思いますか？ (はい・いいえ)  
両方の人にお聞きします。そのように考えるのはどうしてですか？

15.大学の授業以外の場で、「ポルトガル語」を使用する機会はありますか？ (はい・いいえ)  
「はい」と答えた人にお聞きします。  
どのくらいの頻度で、また、どんな場面でポルトガル語を使いますか？

16.あなたが暮らす地域にはブラジルの方が住んでいますか？ (はい・いいえ)

17.あなたにはブラジル人の友人がいますか？ (はい・いいえ)  
そのブラジル人の友人とは、ポルトガル語を学習し始めてから、知り合ったのですか？  
(はい・いいえ)

18.日本に暮らすブラジル人の現状について、何か知っていることを書いて下さい。

19.あなたは、ポルトガル語を学習する前、ブラジル人に対してどのようなイメージを持っていましたか？  
また、現在ではどのようなイメージを持っていますか？  
以前のイメージ：  
今のイメージ：

20. 今、偶然、ブラジル人らしき人が困っている様子を目撃したとします。あなたならどうしますか？

(男性・女性)(年齢： 歳)( 大学 年生)(ポルトガル語学習暦： 年 ヶ月)  
(履修科目名：

◆アンケート結果を希望される方は、ご連絡先をお知らせください。

ご協力ありがとうございました。

## Sumário

### Qual a avaliação dada pelos universitários ao estudo da língua portuguesa.

-No caso dos participantes da Língua Portuguesa I-

Katsumi Kosaka

Departamento de Relações Internacionais

Pelo presente estudo, com a análise dos questionários da pesquisa realizada entre os estudantes que participam do curso de Língua portuguesa I, da Universidade Estadual de Aichi, podemos chegar ao conhecimento de qual a avaliação dada pelos estudantes que participam do curso ao estudo da Língua Portuguesa.

O resultado foi o seguinte:

1) Os participantes do curso compreendem perfeitamente que estudam a Língua Portuguesa para poderem comunicar-se com os brasileiros que vivem nessa região.

2) O número de participantes do curso, que conectam o estudo da Língua Portuguesa às atividades de busca de emprego alcança metade do total averiguado, o que comparado à pesquisa idêntica efetuada entre colegas, constitui um número muito mais elevado.